

## 批判的社会科学の可能性と課題

——アンソニー・ギデンズとのインタビュー<sup>1)</sup>——

ダグマー・ライヒェルト\*

(遠城 明雄\*\* 訳)

Dagmar REICHERT

Möglichkeiten und Aufgaben einer Kritischen Sozialwissenschaft:

ein Interview mit Anthony Giddens.

*Geographica Helvetica*, 43, 1988, pp.141-147.

ここで英国の社会学者アンソニー・ギデンズを紹介することは、もはや必要ないかもしれない。彼の名前はよく知られており、多くの(男性/女性)地理学者 Geograph(inn)en たちはまた彼の著作量から生じる選択の難しさにも慣れていているかもしれない。ギデンズが《社会的構造化理論》によって提案している社会科学的研究の概念的な基礎は繰り返し論じられており、それはギデンズ自身や英語圏の(男性/女性)地理学者たちによっても論文<sup>2)</sup>やインタビュー<sup>3)</sup>の形でまとめられている。

英国やアングロアメリカの地理学におけるギデンズの研究に対する関心は、けっして不思議なことではない。なにしろ《英語圏の一流の社会理論家》<sup>4)</sup>が空間的な固有性と脈絡性 Kontextualität の意味を強調し、いまや人文地理学と他の社会科学との相互関係のための扉を開いているからである。したがって学問的な戦略にとって喜ばしく好都合な《地理(学)が問題である (Geography matters!)》という以上のことがその結果として生じる。英語圏の(男性/女性)地理学者によるギデンズをめぐる、またギデンズとの開始された対話は聞き流されるべきではない。この対話はまず最初に構造化理論それ自体の《批判的読解》を掲げどころとしていたが、すでにその《批判的応用》の多くの経

験にも依拠している(一方で地理学的研究<sup>5)</sup>における概念的枠組として、他方で学際的な共同研究<sup>6)</sup>における共有言語として)。

それに対してドイツ語圏の地理学においてギデンズの社会概念は今までほとんど言及されてこなかったが<sup>7)</sup>、近年になってドイツ語圏においても構造化理論との批判的な取り組みが目立っている。社会科学のアプローチをひとつの領域へと統合しようとするギデンズの壮大な企図に従うつもりはない(例えば、私はそこで結びつけられている多くの立場の暗黙の前提の間に相互対立をみる<sup>8)</sup>) が、ギデンズによって提案された概念の枠組が今のところは無条件に考察に値するという結論に達するかもしれない。例えば、ドイツ語圏スイスの地理学における現在の議論にとって以下の概念がとりわけ大なる期待をいだかせるように思われる。

——社会概念。空間-時間的物質性(1)、——脈絡(2)、——距離(3)、——境界づけられたまとまり(4)としての《空間》を考慮に入れ<sup>9)</sup>、かつこの視座を権力と支配という問題との関係に拡張する社会概念(ギデンズは今年のチューリッヒ講演<sup>10)</sup>でスイスの(男性/女性)地理学者たちとそれに関して包括的な対話を開始した)。

——人間行為についての概念。主意主義にも決定論にも陥らない行為の概念。

\* ウィーン大学 \*\* 九州大学

——行為を構成する要素として存在する多くの空間的情報を相互に結びつけ、社会過程の説明のなかで実り豊かにすることを可能にする理論的枠組（ここで B.Werlen の行為志向的社会地理学（1987）への考察との接点が存在するかもしれない）。

——概念システム。意図された行為結果と意図されない行為結果の間および言説的な知識と実践的な知識の間を区別するとともに、自然地理学的次元と結びつけられるシステムであり、したがって人間生態学的な問題構制に適するように思われる（この巻の Jaeger と Steiner の論文、133 頁がこの方向性を示している）。

——再帰的過程<sup>11)</sup>としての《社会》のモデル。基本概念として社会の実現化の形式と前提が、地理学（例えば開発戦略的あるいは人間生態学的）関心から明らかにされるモデル。諸分野の社会批判的な貢献それ自体を再帰的に観察のなかに含み込むことが許容される。

以上の関連する点について、私は以下のギデンズとのインタビューのなかで一般的な形で取り上げてみたい。ベルンとフリブルでの地理学者大会<sup>12)</sup>の際の《社会における地理学の役割》をめぐる議論に関連して、私は社会理論と科学理論の抽象的な言語において、その場でひとりの話者が要求したことを人文地理学が実行できるかどうかという問いを提起した<sup>13)</sup>。そしてその話者の要求とは、応用研究において（男性／女性）地理学者たちは明解な問題分析、批判的態度、十全な基礎をもった解決の提案を持つことができねばならないということである。

そのために地理学的研究は理論の形式において一般的な方針と知的基盤（とりわけ予測へ向けて）を用意しなければならない。——したがって大きな問題にも関連づけられる。つまり地理学は社会的規範や価値をどのような基盤のうえで批判的に議論することができるのか。ポエシュ（Boesch, 1986, p. 150）が適切に述べるように、実践<sup>14)</sup>をめぐる地理学の政治的な無邪気さを、地理学が重要ではないという理由によって、もはやこれ以上擁護しえないのである。

ここで以下のインタビューにおいて、この学問の自己反省から、内部からアンガージュする社会科学としての人文地理学の可能性と課題を明らかにすることが問題である。一方で科学的探究に対する広範な懐疑と

他方で功利的—テクノクラートの科学信仰との間で、また研究されるものの自明性についての相対主義的な放棄と権力をもった委任者に奉仕する絶対主義的な専門家の方法との間で、批判的人文地理学にとって責任ある研究領域を問うことが繰り返し肝要となる。

**D.R. (Dagmar Reichert)**：あなたのご意見では、社会のなかで社会科学者にどのような役割が与えられますか。あなたは批判的社会科学に対する可能性を考えられますか。

**A.G. (Anthony Giddens)**：それは社会科学と近代の間の関係性の背後から考えてみなければなりません。近代社会科学は、社会変動を理解するための探究だけから生まれてきたものではありません。近代社会科学はその当初から、我々の社会を構成することと密接に結びつけられていました。その点で多くの社会学者が主張するであろう以上に、社会科学ははるかに重要であるように思われます。私にとってその社会的な役割は三つの局面をもっています。第一の局面は純粋に情報を提供することです。それは、近代社会が離婚率やインフレーションあるいはなんであろうとも、規則的な情報に依存しているという事実由来します。

第二の局面は社会学者とその研究の《対象》の間にある再帰的あるいは循環的關係として記述することができます。自然科学的な知とは反対に、社会科学的な情報は受動的ではありません。社会科学的な情報は多くの人々によって様々な仕方で受容されますし、その結果そこで記述されている社会状況に影響を及ぼします。そこから様々な形での責任が生じます。なぜならこの情報を生み出す人物は、彼女でも彼でもこの知識を別の知識に応用することに対するあらゆる責任から免除されうるとは考えられないからです。期待できないにもかかわらず、いかなる社会学者も彼ないしは彼女の観念によって何が生じるかを十分に管理することが重要になります。その観念は全く不可避免的に社会学者という創始者を離れることとなります。——しかしながらこの再帰性それ自体を研究することが、我々の責任の一部にならなければなりません。社会学者の社会的役割の第三の局面は、社会制度や普遍的価値に対する批判にあります。イデオロギー批判はその最も重要な課題のひとつであり、間違いなく最

も困難な課題です。私は《イデオロギー》を、単に虚偽意識として、また意識に影響を及ぼすあらゆる観念をイデオロギーとしてみなす対極にある解釈としてではなく、支配と結びつけられる観念として理解しています<sup>14)</sup>。したがって私にとって、特定の意味規定が権力システムと結びつけられる形式を批判することが根本的な課題のひとつになります。このことはその時に適用される観念が真であるか偽であるかを最初から前提としません。イデオロギーの問題が議論される際には、この問題は括弧に入れられねばなりません。

**D.R.:** この問題を括弧に入れねばならない時に、社会学者たちは自らが批判するイデオロギーに対する特権的な認識の立場、つまりこうしたイデオロギー批判を正当化する立場をどこから持つのでしょうか。

**A.G.:** 社会学者が他の社会学者とその批判的な対話に置かれていることからだけです。この対話は根本的には、特定の情報と権力システムの間の関係の体系的な評価が他の人たちに日常的に可能である時に、そのような評価を許容します。私は、社会学者が認識論的に特権化された立場を自由にできるとかあるいは、こうした問いが知識社会学の伝統的な諸問題や知識の循環性と大きく関わっているとは思いません。社会における権力構造を発見しうること、意味規定の形式、つまり日常的実践を導いてもいる観念システムと権力構造との連関を指摘することは、他の観察者に対して相対的な社会学者という観察者の位置をめぐる問題と関わりあうことでは必ずしもありません。マンハイム Manheim はそこでイデオロギーに対する批判に関して誤った方向性を提案しています<sup>15)</sup>。循環性は社会科学における認識にとって問題ですが、イデオロギー批判の問いと特に結びつけられるものではないのです。

**D.R.:** しかしながらイデオロギー批判は社会科学言明の一形式にすぎないのですか、また同一の理由からコンテクストに依存し、かつ相対的なではありませんか。

**A.G.:** イデオロギー批判と認識論的問いは切り離されねばなりません。イデオロギー批判が、知識の循環性、

つまりイデオロギーとのその固有な結びつきを考察の前提にしていると考えることは、少なくとも私が理解するようなイデオロギー批判では誤りです。社会科学知識の様式、その基礎づけへの問い、あるいは価値は客観的に批判可能であるかどうかという問い——それはハバーマス Habermas が研究していることであり、うまくいっていません——は、それから切り離されます。それによって価値の批判が可能になる確実な認識論的基盤が発見できると期待されるべきではありません。おそらくそうした基盤は追究されねばなりません。全ての関係者がイデオロギー批判のひとつの様式に賛成するような一定の解釈が見いだせるとは私自身は想像できません。ハバーマスの提案は少数の社会学者のみならず、多くの他の人々をも納得させるものではありません<sup>16)</sup>。他方で私も、価値を歴史的連関のなかでのみ分析する歴史的立場を評価しません。私はここでむしろ、例えばアドルノ Adorno に基づく方向性のなかにある立場を支持します。私には価値の批判がそのつどひとつの論理的枠組や経験的発見に基礎づけられうるように考えられません。

他方で、社会学者の実践的研究とその実践的結果——あるいはイデオロギー批判も——がそのつど検討されるたびに、価値批判のあらゆる問いが誇張されることになると思います。その尺度を基盤にして特定の現状を批判するために、確実に十分受け入れられる多くの普遍的価値が存在します。それは、例えば、市民の多くにとってふさわしい生活水準を確保すること、民主的な共同決定を承認すること、地球の生態系を保護すること、男女間や様々な人種間の平等を促進することなどに相当します。

**D.R.:** こうした普遍的価値は、社会紛争においてこのような問い——例えば、私は社会保障給付による扶助やあるいは原子力発電所の費用と便益をめぐる社会科学的な判断を考えているのですが——が現実のものとなる場合に、十分でしょうか。社会科学の見解（そして社会科学の見解の政治的機能）を正当化するために、普遍的価値は十分でしょうか。

**A.G.:** このような場合に価値が問題であるとは思いません。むしろ優先性、目的への指向性と結果の評価をめぐる問いが重要であると思います。原子力をめぐる

議論の場合に、もし原子力が危険であるとしたら、つまり大きな確率で数百万の人々を殺すであろうとしたら、原子力が建設されなければならないとは誰も主張しないでしょう。そこでは原子力が現実には危険であるかどうかの問題なのであって、《危険性》という下で何が理解されているのかが問題なのではありません。支持者と反対者は危険性についてそれぞれ自分たちの考え方を持っています。これは私が言いたいことになってひとつの良い事例であり反証ではありません。それは社会生活の最も議論の余地あるテーマにあたりますが、アウシュヴィッツのような場合と直面した時にはじめて、それは困難になります。

しかしながら私は価値相対主義を支持しません。価値について一定の制限された評価が可能であると思います。——しかしそれはある価値体系の包括的な論理的擁護や超越的な基礎づけではありません。私が考える限りで、説得力ある認識論的基盤は神権政治のシステムにおいてのみ可能であるようにみえます。合理性の内奥にこのような循環性が存在します。ハバーマスたちはこうした循環性を打ち破ろうとしているのですが、ハバーマスとともに次の問いをもって生きねばならないように思われます。つまり理性あるいは理性への義務は理性的にいかにして基礎づけられるのかと。

**D.R.:** 社会科学において循環性と自己言及はどのような意味をもつのでしょうか。循環性と自己言及が知の基礎づけを問題にし、あるいは意思の疎通を可能にするという点で、またそれらが自然科学との根本的な相違を示すという点で、あなたは循環性と自己言及に意味を与えられますか<sup>(註2)</sup>。

**A.G.:** 循環性と自己言及によって何が意味されているのかによります。例えば、社会科学者の活動とその研究領域の間には絶えず交互に修正しあう結びつきがあること、社会に関する社会科学的概念が吟味されること、しかし他方でまた——従来の記述ではあまり強調されてきませんでした——概念それ自体がその《対象》に再び影響を与えるということです。あるいはウィンチ Winch が示したように、ある社会のメンバーが知っていることをいまだに知らない時に、その社会を記述することはできない——その知識をあとでメタ言語に翻訳するかもしれませんが——という点での循環

性。以上のことはおそらくあなたが考えている自己準拠の諸要素を含んでいるでしょう。チェスを理解できるためには、その競技者が知っていること、つまり王とルークの違い、ゲームの戦術などを知らねばなりません。

二重の解釈学という概念、社会科学において人は二つの意味水準とかかわらねばならないこと、つまり社会学者は秩序づけられた概念体系によって、すでにそれ自体ある概念体系のなかで秩序づけられている何かを記述すること、という事実の特徴は、社会科学における理解と前理解のこの交互的な関係が二つの水準にあると述べられている点でこの循環性に関わっています。

**D.R.:** あなたは先に批判的社会科学の社会的責任について語ってられました。あなたのご意見では、こうした責任は、どのような種類の情報、またどのような知を探究することにかなるのでしょうか。ここで普遍的な規則性（たとえ発展を引き起こした過程や発展の抽象的論理、経験的諸現象の領域における規則性であったとしても）に基づく説明や予言が必要になるのでしょうか、そして／あるいはそれは（空間的、時間的、文化的に固有の異なった生活形式の記述と新しい可能性の創造的発見に基づく）一定の見方、目的、戦略に対するオルタナティブの説明を必要とするのでしょうか、そして／あるいは…。

**A.G.:** 私は社会科学が追求する規則性あるいは一般化の二つの様式に言及することで答えたいと思います。一方で慣習の認識に基づく一般化があります。こうした規則性は本質的に、自然科学の規則性からは区別されます。なぜならこの規則性は、行為者の所為 Tun についての知識を考慮することで、行為者によって生み出されるからです。ウィンチは 交通信号の停止を事例にしてこのことを明らかにしています。自然法則的な規則性のようにみえるかもしれないことが起こりますが、一方で運転者は路上交通での行動慣習を知っており、また運転者がなぜこうした慣習に従わねばならないかの理由を受け入れています。一般化の別の様式は、伝統的で自然主義的な理解とあまり違いません。この一般化は本質的には意図せざる結果に基づき、フィードバック機構を超えて規則性へと進展しますが、

この規則性は慣習に導かれた行為からは決して生じないものです。例えば、意図的な行為に依拠しているかどうかはそこからは誰にもわからない貧困化の螺旋、フィードバック過程があります——私は様々なテキストでそれに言及していますが——。しかしながら一見して自然科学的な一般化のようにみえることが、そうした一般化とは根本的に区別されます。なぜなら第二のタイプの規則性は第一のタイプの規則性によって変更可能であるからです。変化へ向けて介入する批判的社会科学の可能性はまさにこのことに依拠しています。社会過程をめぐる知識が人間の行為を規定し、それ故にその行為から生じる規則性の様式を規定するからです。例えば貧困化の螺旋についての知識が獲得されれば、慣習に方向づけられると同時に意識的でもある社会的行為における意図せざる結果を転換させ、貧困化の螺旋の再生産を促進する条件を変える可能性があるからです。

**D.R.:** 近年、地理学において、一般化の有用性つまり非常に普遍的な記述や説明の有用性をめぐって新しい議論があります<sup>17)</sup>。その際に、あなたの構造化理論もあの《グランドセオリー》の事例として批判されているのですが…。

**A.G.:** 構造化理論の場合、あるいは一般に社会理論について、私の見解では《グランドセオリー》は存在しなければなりません。ひとは行為の下で何を理解しているのか、社会制度をどのように考えるのか、社会組織と文化は空間と時間においてどのように構造づけられているのかは、確定されねばなりませんし、それはまた《大きな関心 grand concerns》でもあります。こうした一般的概念でもって、歴史的な時代を超えるようなあの限定的な一般化を行うことが可能ですが、それはたいへん制限されています。例えば、過去、現在、未来についての人間の意識とそれらを結びつける社会関係に応じて、《歴史 Geschichte》の下で理解されることが変化する点に注意しなければ、《歴史》を記述することはできません。したがって史的唯物論などのような人類史の一般理論は私にとって権利を持ちません。

**D.R.:** しかしながら一方で社会慣習についての限定された一般化があり、他方で行為することの結果につい

での一般化がありますが…。

**A.G.:** …私は、社会科学的な一般化の二つのタイプに言及してきました。他方で社会科学における一般化の意味はひょっとすると過剰に評価されています。社会学者が用意しなければならなかった少なくとも同様に重要な知識の様式は、新しい概念あるいは視座を形づくることです。新しい概念や視座を編成することは、社会における別の行為の可能性を開くこととなります。というのは例えば、社会的世界の形成を別の方法で見ることを学んだ人は、別の方法で社会も変えるからです。近年の社会運動はこのことを明らかに示しています。とりわけ《家父長制》といった概念とジェンダー Gender の問い<sup>18)</sup>に対する一般的な注意がフェミニズムを通じてもたらされ、それはまた直接的な社会的行為者のみならず、《社会》を主題化する社会学者と地理学者を別の視点と別の行動へと導いてもいます。

**D.R.:** 知識のこの二つの様式において、新しい視座の出現、つまり芸術の伝統的課題と批判的社会科学の伝統的課題とのつながりをあなたはご覧になりますか。

**A.G.:** 私は、人間に新しい視座を開示するという意図によって芸術を一括して特徴づけられないでしょう。ともかく芸術は近代にいたるまで主に描写的でありましたが、芸術はそれ以上の深い意図をもっているかもしれません。近代芸術も社会科学も近代のプロジェクト、つまり幅広い知に基づいた生活形式の根本的な変更という考えに結びつけられるかぎりでは、類似性があります。近代芸術も社会科学も、いまだに知覚されていない世界の観察可能性を探究します。しかしそれは特定分野にのみ有効で近代芸術もまたそうです。

**D.R.:** 私はもう一度フェミニズムに戻りたいのですが、すなわちフェミニズム社会理論は、現在の社会科学に対してどのような意味をもっているのでしょうか。

**A.G.:** 二つの理由から、根本的な意味を持っています。第一に、私が既に言及してきたように、フェミニズムは、本質的に男性の行為によって支配されている社会科学の既成の考察方法をこの学問にとって根本的に新しい概念と対決させます。第二に、フェミニズム社会

理論および一般的には女性運動を通じて、新しいテーマが研究題目として提起されます。女性の役割の歴史あるいは女性の現代の生活状況を記述することは、経験的な成果のみならず理論的な成果も挙げています。フェミニズム社会理論の大きな意味の第三の理由は、既存の社会理論の理論的説明にジェンダーの次元を取り込むようにするという既存の理論に対する挑戦にあります。私の仕事は実際にいままでジェンダーの次元を考慮してきませんでした。現在私はそれに取りかかっています。例えば、社会的行為者がジェンダー的位置の行為者として種別化されることなしに、私は社会的行為者について語る事ができるのかどうかという問題ですが…。しかしここではまだ明確な答えもっていません。

**D.R.:** それでは別のテーマに移りたいと思います。構造化理論の記述においてあなたは、行為と構造の《弁証法的関係》、《構造づけられた全体性》としての社会システム、社会構造がそのなかで現実化される《契機 Momenten》について語っていらっしゃいます。構造化理論が《社会》の弁証法的な理解を含んでいるといえるのでしょうか。

**A.G.:** ノーです、《弁証法》という概念が正確に用いられ、ヘーゲルやあるいはある程度はマルクス（私が知るかぎり、マルクスが《弁証法》概念を整合的に用いなかったとしても）に基づくような哲学的な思考体系と弁証法概念が結びつけられる時には、イエスです、《弁証法》の概念がむしろより緩やかに用いられる時には、矛盾がある程度は社会変化の駆動力を形成すると思いますが、ただひとつの力でないことは確かだと思います。そして対立を融合するようななかが存在します…。私は弁証法概念を何度か用いましたが、とくに好んでではありません。マルクスの場合に、現実のなかで正確な分析が求められることを隠すために、彼がこの概念を用いるという印象を時々受けます。

**D.R.:** 正確な意味での《弁証法》概念の利用とは。どうして構造化理論が弁証法的論理に依拠すべきではないのか、またどうして構造化理論が（私が考える）理論として全体性の概念とより上位に位置する理性原理

を——少なくとも暗黙のうちに——承認することなく済ませることができるのかが、私にはわかりません。あなたは、西洋史の（例えばヘーゲル的）解釈、あるいは資本主義発展の（例えばマルクスの）説明とは無関係に、構造化理論のなかで純粋な変化の論理として弁証法を考えることができますか。

**A.G.:** ある意味で全体性があるシステムの部分と結びつけられることが重要な時には、そうではないと考えます…。ある社会システムがそうした状態にあるとは思いません。それよりも単純であると同時にまた複雑でもあります。確かにひとは特定の行為のために社会的慣習と規則についての知識を利用しますが、そうした知識を自身で発明もしなければ、主観的にのみ有効であるわけでもありません。そうした慣習や規則は行為者を結びつけ、体系的な仕方でその関係性を規則づけますが、漠然とした全体性の構成要素ではありません。社会的なもの部分が行為者によって内化されることを、デュルケームが考えたような仕方と考えられねばならないことが、私にはよくわかりません…。それは役に立たない観念になるように思われます。私は全体性という概念をあまり用いませんが、それはいわゆる全体性といったなにかが存在しないからです。空間と時間において社会システムの組織の様々な水準が存在しますが、《社会》を《全体性》と結びつけることは少数のシステムの水準に誤った優先性を与えることになるでしょう。私は社会を、個人と社会的なものとの対立として記述しようと思いませんので、私はまた《全体性》と《部分》という概念を使用したくありません。私はそこにかなる関係もみないということではありませんが、行為者、構造、システムについてより適切に語り、この三つを相互にかなり複雑な仕方と結びつけられているものとして考察します。

**D.R.:** 具体的な問いは、暴力、支配、管理というテーマに関係します。『国民国家と暴力』という書物のなかで、あなたはこうしたテーマを新たに概念化し、さらに《権力 Macht》についての社会科学的な概念を弁別するのみならず、主意主義的な権力概念と構造主義的な権力概念の二元論的な区別の止揚を探究されています。

あなたの仕事に依拠してきた地理学者たちは、いま

まで主にあなたの構造化理論の脈絡性を取り上げていますが、そのなかに構想されていた権力の空間的次元の分析の可能性にはあまり触れていません。あなたはとくにこの分野において、地理学者、とりわけ政治地理学の分野からの実りある共同研究の機会を考えられますか。

**A.G.:** 最近、社会学者と地理学者は、《時間－空間の遠隔化 time-space distanciation》という概念をめぐって非常に一般的な水準で《権力》に対する関心に関係しています。異なった社会における時間と空間の把握の様式と方法が、その社会の秩序にとってどのような中心的役割を果たしているのか——他方でまた直接的にはその権力システムが暗黙にしていること——を私は様々な書物のなかで明らかにしてきました。例えば、伝統的社会的発展にとって書字の持つ意味について明らかにしようとしてきました。書字は、時間と空間を超えて社会的な共同生活を再組織化する媒介です——あるいは再組織化を導きます——が、それはまた権力の発展と、農耕、狩猟、採集を超える別の社会形態の発展へ向けての媒介でもあります。しかしながらさらにまた社会学者と地理学者の間には特別なつながりがあります。このつながりは国家の領土性 *Territorialität* に関係します。『国民国家と暴力』のなかで、私は、社会学者がとくに国家との連関で——その連関のあらゆる結果において——領土性を考察してこなかったと主張しました。例えば、伝統的国家的領土性が根本的に国民国家的領土性といかに区別されるかを書きました。それは領土が権力システムにおいてそのなかで関係づけられる様式と結びついています。ここにいまなお多くの価値ある問題が存在しているのです。第三のつながりは社会発展に対する軍事力や軍事的暴力の影響についての関心です。確かにこうした問いは社会学者によって取り扱われてきましたが、地理学者と社会学者はここで確実に実り豊かな共同研究を行うことができるでしょう。なぜなら戦争の遂行と軍事力は地政学的考察にも関係するからです。以上のことが私が現代においてとくに重要であると考えられる批判的社会科学の問題設定です。

## 注

- 1) この論文の出発点は1988年3月にケンブリッジにおけるインタビューであった。その後、私とそのインタビューを短縮し、翻訳し、ギデンズによって最終稿がもう一度点検された。私はこの場を借りて彼の忍耐に対してお礼を述べたい。また対話については、Min.S.S.に、マネージメントについてはE.Yeにもお礼を述べたい。
- 2) 構造化理論の短い要約をギデンズ自身が《A Contemporary Critique of Historical Materialism》(26-29)と《The Constitution of Society》の第一章で与えている。そこでは応用事例も見いだされる。地理学者による簡明的確な要約は、例えば、Pred (1983)、Storper (1985)、Thrift (1983)、Gregory (1989, 1994)である。
- 3) Gregory (1984)。
- 4) Times Literary Supplement
- 5) 例えば、D. Gregory (1982)、A. Pred (1986)、Dear and Moss (1986)。
- 6) 例えば、CURS とサセックスの研究プログラムにおいてである。
- 7) 重要な例外の事例として、E. Binder (1988)の研究が挙げられるだろう。
- 8) 弁証法に関する私の問いは以下のインタビューを見よ。
- 9) 空間－時間的物質性でもって、ギデンズは、存在している所与のものの性質、《locale》として特徴づけている空間－時間的脈絡、《空間－時間の遠隔化》として特徴づけられる空間－時間的距離、ギデンズの術語で《区域分けregionalization》と呼ばれる空間の境界づけ（領域的に指定された境界）、を包括している。
- 10) 《社会の構成における空間の役割》というタイトルをもったこの論文は、Steiner, D., Jaeger, C., Walther, P. (準備中)のなかで発表される。
- 11) 《再帰的過程としての社会》によって具体的な状況における行為と、規則および行使可能な暴力による理想的な秩序付けとの間の持続的な構造化（《構造化》）が考えられている。
- 12) 例えば、Aerni (1986)によるまとめを見よ。
- 13) その議論のR. Naegelisによるまとめを見よ（Naegelis, 準備中）。
- 14) 『社会理論の最前線』（邦訳、1989, pp. 181-218）において、ギデンズはイデオロギー概念と取り組んでいる。彼はそのなかで《科学》と反対のものとしての《イデオロギー》という伝統的な意味を放棄し、イデオロギーを言説の形式の可能な次元として、またその支配の次元として考えている。反論を隠蔽しまた排除したり、物象化することによって、イデオロギーのなかでは全体の利益に対して特殊利害が押し通される。
- 15) K. Mannheim (1929) : 『イデオロギーとユートピア』。
- 16) J. Habermas (1976, 1982) を見よ。
- 17) 例えば、フリブールにおけるスイス地理学者大会での C.

Jäger (1987) による論文の議論やあるいは、D. Harvey, P. Saunders, P. Williams、そして他の多くの地理学者たちとの間の《社会理論の再考》という英国での論争(Society and Space, 5/87, 367-434)、あるいは——ギデンズとはっきり関連している——D. Harvey and A. Scott (1989)、D. Gregory (1994) において。

18) 私はこの場所と以下において、生物学的な範疇の《性》と社会状況的な範疇の《ジェンダー》の間にあるドイツ語では慣用的ではない区別を維持するために、《ジェンダー》という英語の概念を使用する。

## 文献

- Aerni, K. (1986): Die Rolle der Geographie in der Gesellschaft (Einleitung zu den Referaten zum Schweizer Geographentag 1986). *Geographia Helvetica* 3, 126-127.
- Binder, E. (i.V.): Auf der Spur des Neuen. Notizen zur Theorie der Strukturierung von Anthony Giddens. In AUFHAUSER, E. und GIFFINGER, R. (Hrsg.): *Perspektiven Regionalwissenschaftlicher Forschung. Mitteilungen der Arbeitsgemeinschaft für Methoden der Regionalforschung*, Band 18, Wien.
- Boesch, M. (1986): Schweizer Geographie am Wendepunkt. Überlegungen zu einer normativen Metatheorie. *Geographia Helvetica* 3/86, 147-154.
- Dear, M. and Moss, A. (1986): Structuration theory in urban analysis. *Environment and Planning A*, 18, 213-252.
- Giddens, A. (1977): *Studies in Social and Political Theory*. Hutchinson, London. ギデンズ, A. 著, 宮島 喬 訳 (1986): 『社会理論の現代像』みすず書房.
- Giddens, A. (1979): *Central Problems in Social Theory*. Macmillan, London. ギデンズ, A. 著, 友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳 (1989): 『社会理論の最前線』ハーベスト社.
- Giddens, A. (1981): *A Contemporary Critique of Historical Materialism. Vol. 1: Power, Property and the State*. Macmillan, London.
- Giddens, A. (1981): *The Class Structure of Advanced Societies*. Hutchinson, London. ギデンズ, A. 著, 市川統洋訳 (1977): 『先進社会の階級構造』みすず書房.
- Giddens, A. (1982): *Profiles and Critiques in Social Theory*. Macmillan, London.
- Giddens, A. (1984): *The Constitution of Society*. Polity, Cambridge.
- Giddens, A. (1984): *Interpretative Soziologie*. Campus, Frankfurt. (Engl.: New Rules of Sociological Method, 1976). ギデンズ, A. 著, 松尾精文 訳 (1987): 『社会学の新しい方法基準』而立書房.
- Giddens, A. (1985): *The Nation State and Violence (Vol. 2 of: A Contemporary Critique of Historical Materialism)*. Polity, Cambridge.
- Giddens, A. (1987): *Social Theory and modern sociology*. Polity, Cambridge.
- Giddens, A. (in Vorbereitung): The role of space in the constitution of society. Vortrag an der ETH Zürich. In: STEINER, D, JAEGER, C. and WALTER, P.
- Gregory, D. (1982): *Regional Transformation and Industrial Revolution*. Macmillan, London.
- Gregory, D. (1984): Space, time and politics in social theory: an interview with Anthony Giddens. *Society and Space* 2, 123-132.
- Gregory, D. (1989): Presences and absences: time-space relations and structuration theory. In Held, D. and Thonson, J.: *Social theory of modern societies*. Cambridge.
- Gregory, D. (1994): *Geographical imaginations*. Blackwell, Cambridge.
- Gregson, N. (1986): On duality and dualism. The case of structuration and time geography. *Progress in Human Geography* 2, 184-205.
- Habermas, J. (1976): Was heißt Universalpragmatik? In Apel, K. O. (Hrsg.): *Sprachpragmatik und Philosophie*, 174-272, Suhrkamp, Frankfurt.
- Habermas, J. (1982): Vorbereitende Bemerkungen zu einer Theorie der kommunikativen Kompetenz. In: Habermas, J. und Luhmann, N.: *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie - Was leistet die Systemforschung?* 2. Aufl., 101-141, Suhrkamp, Frankfurt. ハーバース, J. 著, 佐藤嘉一・山口節郎・藤沢賢一郎訳 (1984): 『コミュニケーション能力の理論のための予備的考察. 同『批判理論と社会システム理論 (上)』木鐸社.
- Harvey and Scott (1989): The practice of human geography. Theory and empirical specificity in the transition from Fordism to Flexible Accumulation. In: W. Macmillan (Ed.): *Remodelling Geography*. Blackwell, Oxford.
- Jaeger, C. (1987): Theorie und integrative Ansätze in der Geographie. Bericht der Arbeitsgruppe 《Theorie und integrative Ansätze》 zum Schweizer Geographentag in Fribourg 1987. Reproduziert in: STEINER, JAEGER und WALTHER, 3-14.
- Maegeli-Oertle, R. (i.V.): Nachlese zur Theoriediskussion am Geographentag in Fribourg, 1987. In: STEINER, JAEGER und WALTHER.
- Pred, A. (1983): Structuration and place: on the becoming a sense of place and structure of feeling. *Journal of the Theory of Social Behaviour*, Vol. 13, 157-186.
- Pred, A. (1986): *Place, Practice and Structure*. Polity, Cambridge.
- Reichert, D. (1988): *Der Pfad des Sisyphos. Zur Zirkularität in den Grundlagen human geographischer Forschung*. Dissertation am Geographischen Institut der Universität Wien.
- Steiner, D., Jaeger, C. und Walther, P. (i.V.): *Jenseits der mechanistischen Kosmologie. - Neue Horizonte für die Geographie*. Berichte und Skripten Nr. 36, Geographisches Institut der ETH Zürich.
- Storper, M. (1985): The spatial and temporal constitution of social action: A critical reading of Giddens. *Society and Space* 3, 407-424.
- Thrift, N. (1983): On the determination of social action in space and time. *Society and Space* 1, 23-57. スリフト, N. 著, 遠城明雄訳 (1996): 『空間と時間における社会的行為の決定について』日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会—空間

本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会－空間研究の地平』大阪市立大学。

Thrift, N.(1985): Bear and Mouse or bear and tree? Anthony Giddens's reconstitution of social theory. *Sociology* 19, 609-623.

Werlen, B.(1987): *Gesellschaft, Handlung, Raum: Grundlagen handlungstheoretischer Sozialgeographie*. Steiner, Stuttgart.

## 訳注

- 1) ここで「実践」と訳した単語は、原文では Preis となっているが、Praxis の誤りではないかと思われるのでこのように訳した。ボエシュの文章にも、Preis に関わる内容は見られなかった。今回、著者に直接尋ねる時間がなかったのでこのように訳したが、訳者の見間違いである可能性もある。
- 2) ライヒェルト自身の循環性と自己言及に関する議論は、Reichert: Writing around circularity and self-reference., R. Golledge, H. Couclelis and P. Gould eds.,: *A ground for common search*. The Santa Barbara Geographical Press, 1988, 101-123.を参照。